P10　都市周辺砂防ダムの景観設計に関する提案

建設省多治見工事事務所　　原　義文
(株)高島テクノロジーセンター　○横山俊二郎、高光美智代

1.はじめに

砂防ダムは、地域において「壁」を創り出す大きな構造物であり、景観上好ましくない上、日常的にはほとんど利用されない空間となっている場合が多い。そこで近年は、人目に付く場合などは、壁面に修景を施すなど、景観上のマイナス面を補う工夫をするのが通常である。しかしながら、壁というものをもっと積極的に捉え、利用していく工夫もあって良いと考えられる。

そこで、今回、やきもの製造で有名な岐阜県多治見市で砂防ダムを計画するにあたって「人のぬくもり」を感じさせるような景観を持ち、陶器を飾ることができるような機能を持つ、新しい発想による砂防ダムの設計を試みたのでここで紹介する。

2.都市周辺における砂防ダムデザインコンセプト

砂防ダムの景観設計を考える場合、周辺環境や社会的要請を総合判断した上、様々なコンセプトを設定して進めることとなるが、高さが10m程度の砂防ダムは、谷の一部を形成し、時間とともに自然になじむ構造物という基本イメージがあることなどから、ア）美しすぎない、イ）自然風になりすぎない、ウ）エイジングを考える、エ）お金をかけすぎない、ということを念頭にデザインを進めた。

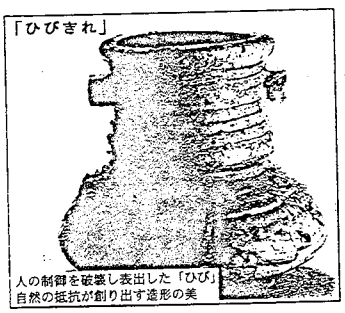
今回砂防ダムを計画した地域は、古くから焼き物を製造し、街づくりに織部焼の精神を取り入れた「オリベストリート構想」を進めつつある地域であることから、砂防ダム周辺を人々が集まり、親しむ場として、①織部の精神を取り入れたデザインとする、②陶器などを飾ることができる構造とする、ということを中心に設計を進めた。

3.人のぬくもりを感じさせる景観

「壁」の修景については、これまで化粧型枠によって凹凸を付ける方法や、絵画・レリーフを施す方法などが一般的であったほか、スリットラインなどのデザインを施す手法が提案されている。　しかし今回、織部焼の精神をベースとして検討を進める中で、この焼き物の「人のぬくもりを感じさせる形」に注目した。

織部焼は、美濃焼の代表格であり、茶人・古田織部が特に好んだことからその名を発するものである。織部は利休の没後、茶道界において一時代を担った人物であるが、その業績は茶の世界だけにとどまらず、革命派とも言える彼の芸術精神はあらゆる生産分野に及んでおり、今日に引き継がれている。「織部好み」と称される彼の精神は、「へうげ」「ゆがみ」「いき」などの言葉に置き換えられ、様々な表情をつくりあげてきた。

そこで、この織部の精神をデザインにとりいれることとした。例えば、左右非対称であり、ぬくもりのあるカーブによる「ゆがみ」は、無限のバラエティを創造させる。これは水通し部を左右非対称であるカーブを付けることにより表現した。また、自然の抵抗が創り出す造形の美である「ひびきれ」は、みぞを付けたり、コンクリートの表面を洗い出しやチッピングなどによって肌触り感を付けることで表現した。



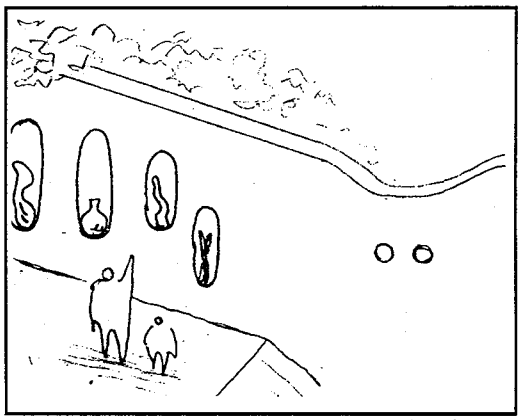
4.砂防ダムの壁の利用

壁の利用については、これまであまり積極的には行われていないのが実態であった。

壁の利用方法としては、自然度の高い地域で野鳥たちのために袖部に穴を設ける案や、壁をギャラリーとして芸術作品の展示に利用する案などが考えられる。

ここでは、前述したように焼き物のまちという立地条件から、壁を焼き物を飾るギャラリーとして利用することとした。

飾り方としては、右図のように、袖部の前面に作品を置くことのできる穴を開け、定期的に作品を交換する。このように、やきものの情報の発信の場とすることで、地域の人々だけでなく、遠くからの来訪者も集まり、親しむ場となることが期待できる。

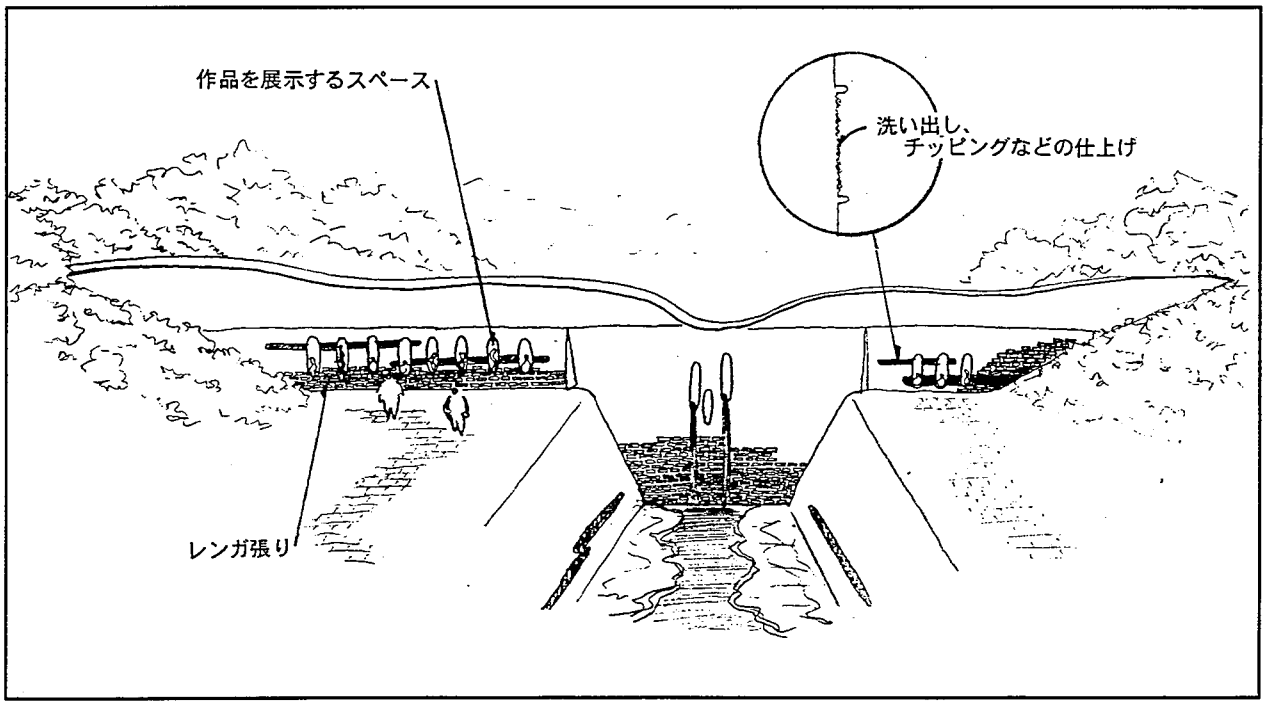


やきものを飾るギャラリーとしての利用

自然の素材として竹を貼ったデザイン

5.やきものギャラリー機能を備えた砂防ダムデザイン

「人のぬくもりを感じさせる形」として、最終的に下図のような砂防ダムを提案した。前述のような工夫のほか、土砂が流れてきたり、時間が経過することによって味わいが出るよう、エイジング効果の期待できるレンガを用いることとした。レンガは、時間経過によって、独特な風合いが出て、柔らかさが増していくことが期待できる。また、できるだけ低コストでということも念頭において、チッピングの風合いを化粧型枠によって出したり、レンガは地域からでる廃材をリサイクルするなど工夫を施した。



参考文献　1）原義文ら：景観的に配慮した砂防ダムデザインについて（平成10年度砂防学会研究発表会概要集）